
1stのリウマ * 拍手ログ ・ 番外編

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1stのリウマ * 拍手ログ ・ 番外編

【Nコード】

N98880

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

1stのリウマの拍手ログと番外編置き場。

挨拶編 1 (前書き)

挨拶編

挨拶編1

以下、竜真さんよりご挨拶

はじめまして。

三島竜真です。

更新率が一番高いので、僕が挨拶らしいです。

ふふっ

いつも1stのリウマを読んでくださって、ありがとうございます。
最近、僕の最強率が上がって、真咲の奴、書きにくいみたいです。
馬鹿ですね。

でも本人が好きな設定を詰め込んだので、自業自得です。

ええ、そういう時はきちんと「バカですね。」と罵ってあげないと
いけませんね。

ふふっ。

誰です？僕のこと鬼畜とか言う人は。

そういう人は属性変換の僕のお仕置き受けてみる？

そうそう、あんまり真咲を焚きつけて、ニヤルマーをアレ（37話
参照）以上の変態にしないように。

これからも僕をよろしく、違った、1stのリウマをよろしくね。

以下、地味なミグよりご挨拶

地味って言うな。

リユカの追究者、3rdのミグだ。

巨体の割りにひっそりとしているとか、影が薄いとか、お母さんだとか言うのは誰だ。

俺はマイペースでいるだけだ。

リウマは変態だし、ニアルマーは完全な変態だし、ちび共がまといや、バレイラはかなり影響を受けているか…

ともかく、俺はノーマルなだけだ。

一人暮らしも長いから、家事をそれなりに上手くこなしてはいるが…そこ、誰だ！俺を乙メンとか言うのは、俺がそこを負わないとパーティーが混沌とするからやっているものであって…

まあ、リウマ、竜真を見てインスピレーションが湧き上がるのは否めないが…

ともかく、俺は地味じゃないぞ。

ああ、すまなかった。

誰かが地味とか言うから…

これから1stのリウマをよろしく頼む。

挨拶編2（前書き）

ニヤルマーとシンです。

挨拶編2

以下、残念な男、ニヤルマーよりお礼

はじめまして。

ニヤルマーです。

最近、アレだの、残念だの、変態だの言われていますが、私はそんなものではございません。

至って真面目に日々を過ごしております。

誰ですか？

リウマ様を私が押し倒そうとしているなんて言っているのは？

リウマ様はそのような下世話な方ではありませんし、下世話な対象でもありません。

美しく強く気高い1st。

その美しさは（以下略）、さらに強さと言えば（以下略）、本当に素晴らしい神の様な方なのです。

いえ、リウマ様は神なのです。

竜「いいかげんにしてくれる？見ろよ！この鳥肌！立ちすぎて鳥になりそうだ。」

リウマ様、置いていかないで下さい。
ああ、待って…

そうそう、1stのリウマもよろしくお願いしますね。

以下、ツッコミ担当シンよりお礼です。

誰がツッコミ担当だ。
ツッコミ担当はロイだろ！

よお！リウマさんの長男シンだ。
リウマさん、かけえよな。
ミグさんもスゲーし、ニヤルマーさんはアレだけど、いい人だ。

俺、出会いはあんなだし、色々あったけど、生きてて良かった。

最近、リウマさんのスパルタがキツいのなんのって…
失敗回数で腕立て伏せだのの罰が決まるんだけど、マジヤバイんだ
って

「つか、俺ら、Eランクだけど、Cの試合勝てんのかよ。」

竜「勝てるに決まってる。」

ミ「多分Bでも勝てるだろうな。」

「うわぁ、リウマさん、ミグさん、何聞いてるんですか！？
ていうか、いつの間に来たんですか！」

竜&ミ「修行不足だな。」

竜「50メートルダッシュ30本」

「いやあああああああ！」

挨拶編2（後書き）

ニヤルマーの愛が重い…

挨拶編3（前書き）

バレイラとロイです

挨拶編3

以下、ニアルマーを唯一庇う子、バレイラよりご挨拶

カキカキ…

《こんにちは、バレイラです。》

けしけしカキカキ…

《パーティー唯一の花でした。》

けしけしカキカキ…

《この前、ニアルマーさんが竜真さんの買い物に付き合っていました。が、とっても嬉しそうでした。》

けしけしカキカキ…

《ミグさんが作ってくれた服がとっても可愛くて、気に入ってます。》

けしけし…

ロイ「バレイラ、何してるの？」
カキカキ…

《事故紹介…だよ。》

シン「バレイラ、こっちおいで、髪結わいてあげる。」

けしけしカキカキ…

《ちょっと待つてね。ロイ、交代して》

ロイ「事故紹介って…まあいいや、バレイラ、変わるから行っていいよ。」

けしけしカキカキ…

《ありがとう。》

とたとたとた…

あ…行っちゃったよ…

以下、毒舌王子ロイよりご挨拶

毒舌王子って何？

こんにちは。ロイです。

シンもツッコミ担当は僕とか言ってるけど、僕はツッコミをしていく訳じゃないんだよ。

だってあのパーティーの人達って、ニヤルマーさんを慰める人少ないんだもん。

放置されたら可愛そうじゃない。

え？慰めてないって？

失礼な精一杯に慰めてるのに

慰めじゃなくとどめ？

「そう、たまにはニヤルマーにも優しくしてあげなよ。」

あれ？リウマさんいつきたの？

「さて、今日は杖術の特訓するぞお。」

僕の武器を決めたんですか？

「んにゃ、真咲がまだ悩んでる。魔術一本にするか悩ましいらしい。」

そうですか…

もう少し先ですかねえ。

「まあ、本編に記述がないだけで、一応君も戦闘術を体験してるからねえ。」

ややこしいですね。

あつ…ニヤルマーさん。

「僕、行くからあとよろしく。」

リウマさんが言ってしまったので、僕も行こうかな。
じゃあね、皆。

挨拶編3（後書き）

バレイラが自由人だ…

挨拶編4（前書き）

リーシャと竜真父

挨拶編 4

以下、ミグの嫁、リーシャよりご挨拶

リーシャです。

ミグの嫁って…まだ、そんな…
ミグのこと？

昔からリーシャ、リーシャって着いてきたわ。
凄く器用だったし…
小さくて可愛かったのに…
大きく育ったなあ

「リーシャ…何してるんだ？」

自己紹介よ。

ミグの昔話してたの。

「なんだってそんなこと……ああ、今の俺のことをどう思っているのかを聞き出したかったんだな？」

え？今のミグ……

「なぜ黙る」

……… かつこいいわよ
……… 待って、ミグ、落ち着いて…

ん~~~~あっん……

―ミグに襲われたようだ。

以下、三島獅子王よりご挨拶

はじめまして。

三島獅子王、竜真の父です。

―奥様について教えて下さい

妻ですか？

そうですね〜いつまでも可愛らしいですよ。

―それはそれはお暑いですね。

この前もすっかり階段の一番上から足を踏み外しまして、僕の上に降ってきました。

まるで天使が使われたようでした。

―それは危ないんじゃないかな…

生粋の深窓の令嬢に生まれ、芯が通った素晴らしい女性です。

「父さん…惚気るのもほどほどにね。聞いてて恥ずかしいよ。後、母さんに気を付けてって伝えてくれる？」

いいよ。竜真君は心配性だなあ。

「いや、うん…ドジっ娘属性だから、見てて怖いんだよ」

―以上、三島獅子王さんでした。

ニアルマーの報告書・シゲルドの弦き1（前書き）

ニアルマーの報告書シリーズ1

ニヤルマーの報告書・シグルドの眩き1

ニヤルマーの報告書1

シグルド様、何とかリウマ様に同行者になる許可をいただけました。もうすぐロドにつくかと思えます。

先日、ピピンにて山賊退治をいたしました。

なんと五十名以上になる山賊をリウマ様は一人で全て捕らえてしまったのです。

素晴らしいです。

他にも色事においてもリウマ様は1stにございました。素晴らしいです。

あの動きはそうできるものではございませんし、持久力、質量ともに1stとはこんなにも偉大なのかと心奮えました。

また何かありましたらご報告致します。

変な部下からの報告書を読んだシグルドの眩き1

もうロドに着いているんですか。かなり早いペースで歩んでいるのですね。

ところで…一体お前はナニを報告するのかな？
以前からズレているところはあったが…

ニヤルマー…リウマ殿以外のことも書いて寄越しなさい。

ニヤルマーの報告書・シゲルドの弦き1（後書き）

どこかずれている主従だと思えます。

ニヤルマーの報告書・シグルドの呟き2

ロドではかなり大規模な事件が起きておりました。リウマ様の勇姿が眼に焼き付いて至福にございます。

魔術士が絡んだ事件でございましたが、リウマ様と蒼騎士のブロス様、及び魔術士ギルドより戒厳令がでておりますゆえ子細を申し上げることは出来ません。ですが恐ろしい事件でございました。

ロドから旅に道連れが増えました。事件に巻き込まれた子ども達にございます。少年が二人、少女が一人の三人がリウマ様が養い子として連れて行くことになりました。

賑やかな旅になりそうです。

また何がありましたらご報告いたします。

シグルドの呟き

リウマ殿が本当に好きなのだ。それにしてもかなりの事件が起こったようだ。

同じ街に1stが二人も揃ったとは……子どもが巻き込まれた事件か……凄惨なものだったのだろうか。

ニヤルマー……子ども達におかしなことを教えてはいけないよ。

ニアルマーの報告書・シゲルドの弦き2（後書き）

ニアルマーがまともな報告している！との驚きの拍手の一言に吹き出しました。

ニアルマーは基本的に真面目キャラですから。

〈番外編〉クリスマス（前書き）

あの時僕は…

〈番外編〉クリスマス

「九十九！」

「竜真、待つてたぜ。」

クリスマスイブイブ、12月22日と言えば明日は祭日。

九十九忠昭の名幹事と三島竜真の女ホイホイは合コン王の名を好きにしている2人にとって、この日はクリスマス前の最終入れ食い日である。

「今日のお相手は一部上場企業の秘書のお姉様だ。」

俺、上出来！と九十九が誇らしげに笑えば、竜真は演出を考える。

「可愛い系か俺様か…どっちがウケるかなあ。本当に九十九の人脈スゲー。」

「ふふふ、OLさんからナースにお医者さん、女子高生まで幅広く人脈を広げておりますよぉ」

九十九が携帯を揺らせば、竜真は九十九と肩を組んだ。

「流石、俺の相棒お」

「もつと誉め讃えろお」

「うわあゝ久しぶりな夢見た…僕ばっかだあゝ」

竜真は苦笑しながら起き上がった。

向こうにいる時に最後に一緒に居た友人。

九十九と遊びまくっていた生暖かい過去が懐かしい。

「リウマ、楽しい夢でも見ていたのか？」

「師匠、…おはようございます。からかう気満々そうなので言いたくないです。」

「なんだよ、言えよ。」

ヨルが喜色満面、嬉々としているのを引き気味で竜真は見ている。

「言いませんてば。」

「言え」

「言わない」

「言え」

「言わない」

「言え」

「言わない」

「言え」

「言わない」

・
・
・
・

「しつこいぞ！おっさん！」

「誰がおっさんだ！お兄様と言いなさい！お兄様と！」

バタバタと竜真が逃げ、ヨルがニタニタと追い掛ける。
2人が通った後には魔物の屍が転がっていたのだった。

〈番外編〉クリスマス（後書き）

さあ言いましょう！

竜真さんサイテー！

爛れた学生さんだったみたいです。

〈番外編〉バレンタイン

「……………竜真君、好きです。私達とお付き合ひして下さい」……………」

竜真は目を丸くしていた。

校門を出た途端、差し出される複数のバレンタインチョコ。

チョコとともに差し出される言葉は「私達」と付き合っただ。

「私とじゃなくて、私達となの？」

あまりのことに竜真はポツリと疑問を呟くと、見たことある三年生の先輩が代表者として答えてくれた。

「竜真君の競争率高すぎて…個人だと大変じゃないかって…だから、同盟することにしたの。ね？私達と付き合っただ」

竜真は頭をポリポリとして、チョコを一つずつ受け取っていく。

「付き合う以上、出来るだけ公平にするように気を付けるけど、別れる時も全員一緒だからね。」

竜真が苦笑し気味に言うと、女の子達はキャーキャー言いながら、喜びあい、竜真に抱きついた。

竜真十七歳、十五股で女の子とウハウハな青（性）春である。

〈番外編〉エイプリルフル（前書き）

2011年のエイプリルフル

〈番外編〉エイプリルフル

2011年のエイプリルフルの小話三本です。
ミグ編、ヨル編、ニヤルマー編です。どうぞ！

*ミグ編

「僕…実は女なんだ」

宿で朝食を取るため竜真と待ち合わせをしていたミグは何故かドレスを着て現れた竜真に顔をしかめた。

髪を隠しているが、顔は出している竜真が少し声を高くしていると、十分に女に見えると言うか、女にしか見えない。胸もどうやったか、ほんの僅かだが膨らみがある。

「竜真……何の冗談だ」

「ミグなら信じてくれると思ったのに」

顔をくしゃりと歪ませ涙を流した竜真にミグは焦った。ミグは事実として竜真が男と知っている。しかし、この場に居るのはミグと竜真だけではない。タベ二人と同じく宿に泊まっていた客やこの宿に働く給仕がいるのだ。

ミグに集まる全ての視線が言っている。

——そんな極上の美少女を泣かせるとは、お前何様のつもりだと

「うをぁ！」

ミグは隣の寝台に寝ていた竜真を見て、心底冷や汗をかいた。

「ミグ……うるさいよ」

「すまない」

ミグの夢見が悪い日の一夜でした。

* ヨル編

「僕…実は女なんだ」

宿で朝食を取るため竜真と待ち合わせをしていたヨルは何故かドレスを着て現れた竜真に顔をしかめた。

髪を隠しているが、顔は出している竜真が少し声を高くしていると、十分に女に見えると言うか、女にしか見えない。胸もどうやったか、ほんの僅かだが膨らみがある。

「リウマ……何の冗談だい？」

「ヨルなら信じてくれると思ったのに」

顔をくしゃりと歪ませ涙を流した竜真にヨルは焦った。ヨルは事実として竜真が男と知っている。しかし、この場に居るのはヨルと竜真だけではない。タベ二人と同じく宿に泊まっていた客やこの宿に働く給仕がいるのだ。

ヨルに集まる全ての視線が言っている。

——そんな極上の美少女を泣かせるとは、お前何様のつもりだと

「お前が女なら俺は抱けるぞ！」

「何気色悪いこと言ってやがる！寝言は寝ていても言つな」

寝ていたヨルは破壊的威力のクッション攻撃を受け、飛び起きた。どうやら夢だったようだ。

「……なんだ。やっぱり女じゃないのか」

竜真の真っ平らな胸に目をやり呟く。

カッ！

サイドボードにナイフが深々と突き刺さる。

「師匠……早死にしますか？」

竜真の逆鱗を触りまくったヨルの危険な一夜の光景でした。

ラスト

*ニヤルマー編

「リウマ様、わたくし本当は女性なのです」

自信満々に胸に手を当て言うニヤルマーにミグを除く四人は目だけで面白い前フリが来たと笑う。

「知ってるよ」

「知ってるに決まってんじゃない」

「今さらだね。ニヤルマーさん」

《ニヤルマーさんが女の子なの知ってるよ》

さも当然とばかりに言う四人にニヤルマーはほろほろと涙を溢す。見兼ねたミグがニヤルマーの肩をポンポンと叩き宥めた。

「お前ら苛めるのは程々にしろよ。ニヤルマーが泣いてるじゃないか」

「ニヤルマーさんが遊んで欲しそうだから乗ってみただけ……」

「ごめんなさい。ニヤルマーさん。からかつと面白くって……」

《ニヤルマーさん。ごめんね》

ロイ、シン、バレイラがニアルマーを囲み謝ると竜真は何故か覆面を取ってニアルマーに近寄った。

近寄って膝をあわせて、女の子の様に座ると顎の下に両手拳をあてて上目遣いに可愛い声でこう言った。

「ニアルマー、僕、こう見えて女の子なんだ」

ニアルマーは鼻血を噴出させ撃沈した。そんなニアルマーを見て竜真は鼻で笑う。

「このぐらいやってから落ち込め」

「「「いやいや、それ違うから」「」」

手をパタパタ振って鼻血塗れに沈没したニアルマー以外の男達は声を揃える。

《リウマさん、あたしにそれ教えて》

バレイラは一人、竜真の可愛い仕草に惹かれたようだ。
竜真と楽しい仲間達の日常風景。

〈番外編〉エイプリルフール（後書き）

いかがでしたか？ニヤルマーへのスループレイ（笑）

ミグは女であってほしくない。

ヨルは反対に女ならバツこいやぁー！的な反応でしたね。
ヨルさんたら地雷踏むのうまいんだからぁゝ

リウマイメージ（前書き）

ここからは作者によるイメージ画が付いています。
見たくない人、パソコンの人はオフにして下さい。

リウマイメージ

美しい髪、細かく揃った睫毛、照れてほほ笑むその姿にニアルマーは一目ぼれをした。

「なんと美しい方でしょうか」

ニアルマーは主人が雇った家庭教師にうつとりと魅入った。派手な音を立てて書箱が落ちる。

「あの方のお名前は何というのでしょうか…」

> i 1 9 1 5 9 — 2 1 1 5 <

あの方が旅立つと聞き、私はシグルド様に懇願した。
どうかあの人と行かせてほしいと…

あの美しい人、1 s t のリウマ様とともに生きたいと…

シグルド様はお笑いになりながらも、こんな私をお許しになり、さらにはシグルド様の部下としてリウマ様に付いて行っても構わないと行ってくださいました。

人生の中でこれほどまでにうれしいことはありませんでした。
シグルド様に一生の忠誠を誓います。

シグルド様、あれからニヤルマーは新しい世界を発見しました。
とても幸せです。

リウマイメージ（後書き）

ニヤルマー―目惚れ編でした。
今や病的…

〈お気に入り千件登録御礼番外編〉 竜真とミグの出会い編（前書き）

遅くなりましたが、お気に入り登録千件となりましたこと御礼申し上げます。

〈お気に入り千件登録御礼番外編〉竜真とミグの出会い編

「見てるのが趣味？それとも斬られたい？」

気絶している女の身なりを整えた絶世にして傾国の美少女顔の男に凄まれ、その男は出てきた。

「見てるのが趣味なわけではない。途中で水を差すのも野暮だと声がかけれなかったただけだ」

現れたのは竜真より最低でも三十センチは大きい男だった。灰色の髪は肩胛骨あたりまで伸びていて一つに括られている。筋骨隆々といった体系ではないものの、体が小さい竜真にしてはイラツとするでかさだ。

マリシュテンと大人の一戦を交え、その前にぼろぼろにされた上衣を着直しながら竜真は長身の男から目を離さない。この神殿にたどり着けるなら最低でもA以上の腕前だ。数字持ちなら安心できるのだが、Aランクなら信用できない。

「こんな色合いだけど、僕は人型じゃないから安心していい。僕はリウマだ。冒険者なら一度は聞いたことがあるだろ」

気持ち良すぎて失神中のマリシュテンを竜真は抱き上げると祭壇の上にある椅子へと座らせ、大きな男と対峙した。

男は竜真が名乗った名に動揺を隠しきれず、ただ黙って竜真の行動を見ていた。

リウマとは最近1stに上がった男だが、数字持ちになってから1stに上り詰めるまで最速記録の持ち主だ。覆面を常に身につけていて謎めいた存在だが、その実力は確かだと男は聞いている。

「で？あんたは？」

「3rdのミグです」

「リュカの追求者か」

男、ミグは自分の二つ名が即返ってきたことに驚いていた。全冒険者の一割と言えど数字はそれなりの人数が居るのだ。

「数字持ちの名前と二つ名ぐらいは頭に入ってるよ。そんなに驚くことじゃない」

当たり前のことと鼻を鳴らし竜真はミグを見据えた。そんなある種の緊迫感ある時にミグは美しい風景を初めて見たような感動を味わっていた。ミグは何かに操られるように竜真の傍に寄って……

「俺が作った服を着てください！」

そうしてミグがカバンから出したのはふりっふりに最高級のレースをふんだんに使ったドレス。もちろん女性用だ。

「……それ……ドレスだよね？」

それはそれは可愛らしい桃色のドレス。

「似合えば問題ないです」

「着なくても分かる。似合う！……でも着る気はない！着せたいなら男物を持って来い」竜真は言い逃げた。

「待つて！」ミグは追い掛けようとしたのだがマリシュテンがむくりと起きる。

「あなた誰？リウマは？つてその衣装可愛いわ！」と開口一番に宣いミグが口を出す隙間なくドレスはマリシュテンにふんだくられた。

「専属にしてあげるわ。で、リウマは？」

「……ちよつと外へ」

「ふーん。呼んできてくれる？」

ミグの背中から冷や汗が出てくる目の前の女からは底知れぬ圧力を感じた。そしてミグは脱兎のごとく竜真を探しにその部屋から出たのだった。

「……久しぶりの女装オフアーだった」と竜真は覆面を付け直し、木々の間を歩いてた。

深い森の中は薄暗く、足元を邪魔するかのように張り巡らされた木の根をまるで何もない平坦な道を歩くようにその足取りは軽い。

「久しぶりに簡単に抱き潰れない人に会えたから頑張っちゃった。んゝ腰が軽い」

竜真はご機嫌に歩いていた。そこへ足元から細い触手が現れて竜真の足を絡め取ろうと攻撃してきた。

「エンカウントになってないよ」等と軽口を言う間に剣を引き抜き触手を切り刻む。触手の持ち主も斬られたことを認識できない程で、数秒間の沈黙の後、森の中に魔物の悲鳴がこだまする。

「うーるーさーいー」と次の瞬間にはその魔物は切り刻まれていた。ただしその魔物には高価買取部位があり、そこだけのみが無事に取り残されていた。

「サナダリブ……」

ミグが追い付いたのは竜真の剣が乱舞していた時だった。竜真の相手はサナダリブと言う植物系の魔物でランクはAの手強いものだったはずだが、竜真の動きを見ると赤子の手を捻るより容易いことの様だった。ミグから漏れだした声に竜真が振り替える。

「また覗き？」

「いえ、凄い絶叫が聞こえたから来ただけです。近場にて良かったです。女性が起きてあなたを呼んでいます」

「あーマリシュテン起きちゃったか。流石神竜タフだね」

この場にマリシュテンが居たら、竜真には言われたくないと言っただろう。ミグにしてみたら竜真が何気なく言った神竜と言う言葉に反応していた。あの女性はもしかしくしくても自分が追い掛けていた古の神だったのではないのかと考え込む。それならばあの気迫も頷ける。

「えっと…ミグさん？」

「さんはいらないです」

「じゃあミグ、僕もこんな口調だから気安い言葉使いにして欲しい。
ところであのドレスはどうした？」

「あの女性に」

「奪われたみたいだね。もう一つ聞きたいんだけど、リュカの追求者ならあの遺跡、神殿みたいなんだけど知ってる？」

「いえ……いや、特には……つい先日見つけた資料に神が居たとあったので」

「……………よし。調べに戻ろう」

二人は再びマリシュテンの神殿へ向かい歩きだした。

こうした出会いから真面目な歴史学者である側面がありながら竜真にとって変態の一人の称号を得ていたことをミグは知らない。変態と言っていた人物が無二の親友になったことに竜真は後に苦笑いしたのは本編での話。

〈お気に入り千件登録御礼番外編〉竜真とミグの出会い編（後書き）

ミグ……あれだけ変態って言われていたのに気が付けば親友の立ち位置に！そして出会って一年しかないのにあの仲の良さですよ！びは男の友情です。

この後も別の件でミグは出会い……なこともあるかどうか（おい！）

改めて今後も1stのリウマをよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9888o/>

1stのリウマ * 拍手ログ ・ 番外編

2011年5月20日15時16分発行